

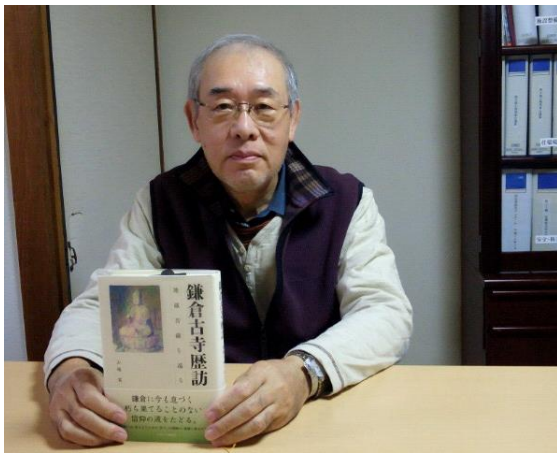
鎌倉を紐解く

2冊目の鎌倉本は「地蔵菩薩」

山越 実 (やまこし みのる) さん

鎌倉を書き始めたキッカケ

せっかく鎌倉に住んでいるのに鎌倉をよく知らない。そう思った時から山越さんの探求心が首をもたげたようです。鎌倉ロジユマンにお住いの山越さんとの約束の時間に伺うと山越さんは淡々と話し始められました。



「歴史好きは父親譲りかもしれません」まだ中学生だった山越少年に父から与えられた本は和辻哲郎の『古寺巡礼』だったそうです。父もサラリーマンの傍ら歴史書を読破する方だったそうで筋金入りの歴史好きかもしれません。

単に寺院を回るだけでは面白くない。少年の心のまま観音さまを訪ねて書いた最初の本『鎌倉古寺歴訪』（文芸社、2006年）の帯には“軒端の梅よ春をわするな 四季の風の中に古人（いにしえびと）の声を・・・”と書かれていました。世知辛い時代に凜然と思い巡らす不安、怒り、憎しみ、欲望などしばし忘れて、心の中に別世界を拓きたい……。鎌倉三十三観世音霊場探訪記。

帯には三十二番札所東慶寺の文章が添えられています。“東慶寺には四季を彩る清楚な花が絶えず咲き、訪れる人の心を温かく包み込んでくれる。初春は綻び始めた梅が迎えてくれる。鶯が鳴く頃は白木蓮や彼岸花が美しい。そんな中、淡紫いろの小さな花を穂状に無数に付ける十二単は、優雅な名と気品で独特の雰囲気漂わせる。東慶寺に相応しい花である。夏は花菖蒲や紫陽花などが、眩しい陽の下で楽しめる。透明な空が広がる初秋には、秋桜や竜胆が花を付け、晩秋から初冬にかけて楓や銀杏の紅葉・黄葉が華やかさを増す。”



サラリーマン時代

山越さんは昭和46年（1971年）に日立製作所入社、コンピュータ事業部を経てビジネスソリューション事業部主管技師として活躍されたそうです。

当時の会社では未開拓だったソリューション（問題解決）分野で様々な苦労をしたが、保険会社などに多くの知人、友人に恵まれ『保険ビッグバンとサイバーインシュアランス』、『保険進化とリスクマネジメント』などの共著があり、多数の論文も発表されているそうです。



趣味は読書、史跡巡りと言われる山越さんですが、多面的な視野と多くの人との協力を取り付ける力が鎌倉探訪に力を発揮したのだと思います。

最初の本を出してから多くの出会いがありました。鎌倉歩きを通じ山越さんと出会った人々との交流がこの本を出版するための財産になったようです。

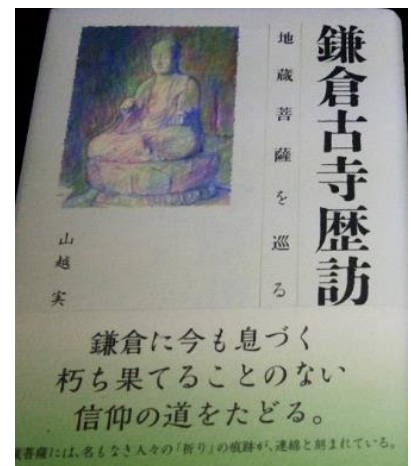
お寺によって様々な反応がありました。信仰の対象であるとしてどうしても写真を撮ることができなかった寺院も、出版社などの協力で許可されたこともあったそうです。

親の介護と2冊目の出版

サラリーマン生活に終止符を打ったころに始まった母親の介護は大変だったようです。介護のために費やした歳月は5年を超え、山越さんの奥様の親の看病や介護の時間が続きました。母親を見送ることができた時に仲間たちがねぎらってくれたそうです。その時に2冊目の本を出す決心をしたのだそうです。“酔っぱらった勢いです”笑いながら答える山越さんにとっても友人たちの励ましは地獄で仏のお地藏さまだったかもしれません。

「鎌倉古寺歴訪 地藏菩薩を巡る」（かまくら春秋社、2014年）の帯には“鎌倉に今も息づく朽ち果てることのない信仰の道をたどる。”とあり、“地藏菩薩には、名もなき人々の「祈り」の痕跡が、連綿と刻まれている。”と続いています。

鎌倉を散策して思ったことは、視点を変えて歩くと、同じ街でも違って見えることである。建築物を調べて歩く旅、仏像を探す旅、花を求めて歩く旅、いろいろな路を探索する旅など、それぞれの目的に応じて歩くことが楽しさを増加させる、次なる目標を定めて、これからも郷土鎌倉を歩いていきたい。著書のあとがきの次の文章に心惹かれる人も多いのではないのでしょうか。この文にこめられた山越さん自身の次なる出発への言葉かもしれないからです。



「鎌倉古寺歴訪」

1. 禅宗寺院の多い山ノ内を歩む
2. 扇ヶ谷の古刹を歩む
3. 鎌倉の中心地（小町・西御門・二階堂）を歩む
4. 金沢街道（浄明寺・十二所）を歩む
5. 極楽寺坂周辺を歩む
6. 大町大路を歩む
7. 材木座を歩む
8. 由比ヶ浜大通りを歩む
9. 大船・今泉・岩瀬を歩む
10. 山崎・台を歩む
11. 後北条の里（岡本・玉縄・植木・城廻・関谷）を歩む
12. 手広・鎌倉山・深沢地区（上町屋・梶原・常盤）を歩む
13. 腰越を歩む
14. 衣張山遊歩道から名越切通を歩む
15. 天園ハイキングコースを歩む
16. 番外

著書の目次をのぞくだけで山越さんの生き方が見えるようです。

